

AGULI

Aoyama Gakuin University Library Information

青山学院大学図書館報

特集 図書館のこれまで・これから

No.100

April 1, 2016

目次

巻頭エッセイ
 大学図書館の新しい発信と
 共有のメディアとして
 三村 優美子…………… 2~3

特集 図書館のこれまで・これから

AGULI創刊の頃の理工学部
 図書館の思い出 西尾 泉…………… 4

図書館機能の変質・雑感
 半田 正夫…………… 5

貴重図書閲覧室について
 三嶋 輝夫…………… 6

「普遍的精神の富」 西村 哲一…………… 7

「なぜそこに図書館が？」
 —キャンパス、理念を語る—
 伊藤 悟…………… 8

図書館の階段 永山のどか…………… 9

ドキュメンタリーの収集
 大石 泰彦……………10

開架図書室と「本を読む本」
 田中 正郎……………11

新図書館計画策定に寄せて
 押村 高……………12

100号記念おめでとうございます！
 茂 牧人……………13

デジタル時代の図書館に期待
 すること LOPEZ Guillaume……………14

やはり本は読もう 稲積 宏誠……………15

図書館のそばに住む 会田 弘継……………16

未来志向でも、図書館は大学の
 いのち 新倉 修……………17

100人が選んだ100冊…………… 18~19

図書館広報板…………… 20



大学図書館報創刊にあたり

大学長 鶴 厚 昌 和

開業となっていた大学図書館の改善について、
 館長を中心とする図書館スタッフの努力で研
 がらなれた結果、今般とり
 及手着すべき四つの暫定案が
 示されるに至りました。その中
 一つとして、利用者への情報サ
 ービスとしてこの年度始めから限
 定ガイドが発行されております
 。さらにこの夏の図書館増設策
 には「図書館利用者」の発行
 予定されているとのことであり
 ます。



学部生を擁し、1万7千名に及
 ぶ学生と大学記者を持つ青
 山学院大学となった本学で
 今後研究と教育の質を高める
 が重要な課題となっておりま
 す。目下策定中の新館完成と共に
 今後の大学付帯研究所が開設

No.1 Oct. 1987



No.13 Oct. 1990



No.67 Nov. 2004



No.84 Apr. 2009

大学図書館の新しい発信と共有のメディアとして

三 村 優美子

MIMURA Yumiko

青山学院大学図書館報 AGULI が記念すべき 100 号の発刊の運びとなりました。AGULI は、学生、教員・職員との間の図書館活動の連絡と情報共有のメディアとして大切な役割を果たしてきました。図書館報は、それぞれの大学の理念や価値観、図書館に対する想いを色濃く反映しています。AGULI は、毎号、大学の風景を描いた絵が表紙を飾っています。小さな広報誌ですが、デザインの美しさにこだわってきたのもその特徴の一つです。そして、編集委員会の企画に基づき、全学部・研究科の教員の方々からエッセイの寄稿をお願いしてきました。大学図書館への意見、図書館利用の提案、海外の大学図書館の紹介、研究のエピソード、心に残る本の紹介などその内容は多彩です。いずれも図書館への想いや温かい気持ちが伝わってくるようです。

日本の大学図書館が多くの問題や課題に直面していることは改めていうまでもありません。何よりも若者人口の急減により多くの私立大学が経営的に厳しい状況に置かれています。そのしわ寄せが図書館を直撃しており、図書館運営

にかつてのようなゆとりがなくなっているのが現状です。当大学図書館も例外ではありません。しかし、他大学の図書館と比べたとき、それでも青山学院大学の図書館は恵まれていると感じることがあります。それは、大学の活動基盤としてあるいは“共通の資産”として図書館を大切に捉える思潮がしっかりとあるということです。大学図書館は大切に守られてきたと思います。

その一方で、大学教育と研究の場における図書館の役割と位置づけが急速に変ってきています。以前は、大学図書館の最大の課題は急増する図書・資料をいかに効率よく収納するかにありました。大学図書館の役割は一義的にはいかに多くの図書・資料を擁しているかにあり、100万冊とか150万冊という数字がその図書館の実力を象徴していたのです。しかし、電子化の進展は図書館のあり方を大きく揺るがすものとなりました。電子化は、図書館の物理的・時間的制約を解放するものとして大きな可能性を秘めています。ただし、データベースや電子ジャーナルの多くが海外企業によって運営されて



No.1



No.2



No.3



No.4



No.5



No.6

おり、費用負担の大きさや包括契約の内容が日本の大学にとって有利なものではないとの指摘があります。大学の研究の共通インフラであることから、データベースや電子ジャーナルをどのように維持していくのか、大学全体として戦略的に取り組むべき課題です。

第二の課題は、学生達の学びをどう支援していくかということです。大学での学びが、教室での講義の時間を超えて、主体的な予習や復習の場へと広がっています。また、報告や発表のためのグループ研究の場が必要です。このような学びの場として、資料やパソコンなどを備えた図書館の空間的活用が重視されるようになってきました。そのためには、静謐な空間だけでなく対話や討議ができる賑やかな空間も用意される必要があります。これは、ラーニングコモンズとしての必要要件です。ただし、当大学図書館では、この空間的要件だけでは十分でなく、学部1年生や2年生の主体的学習を支援するために適合する“学習コレクション”の設計や編集が必要と考えるようになりました。専門分野へ進む入口として、学生達の興味を喚起し学習の手がかりとなるような資料や文献をテーマ別に編集するというもので、大学新図書館計画の基本構想の柱の一つに位置付けています。利用しやすい図書館を目指すということです。

第三の課題は、学生、教員・職員だけでなく、

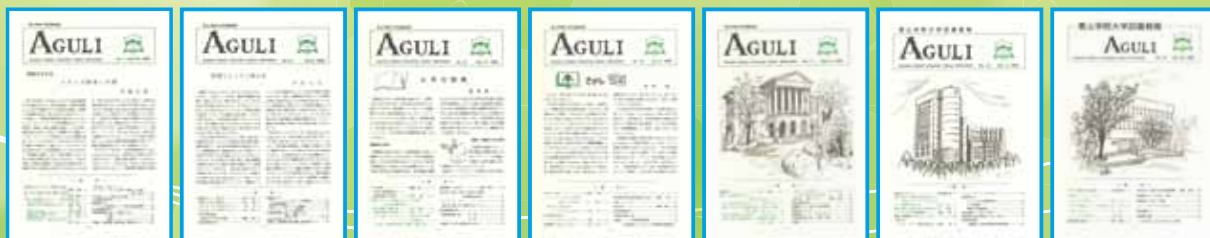
卒業生や退職された教員・職員の方々も含めて、図書館が、ともに学びともに発見する場でありたいということです。最近の公共図書館では、経験価値という視点にたって人々に共有される場づくりを目指す動きが目立ちます。社会的役割を担う大学においても同様です。青山学院大学の140年という歴史の成果は、大学図書館に集中して蓄積されているように思います。大学図書館は、過去と現在そして未来に続く旅のまさに道標の役割を果たすことが期待されています。

大学図書館長に就任して気づいたことが一つあります。つまり、図書館は大学の“顔”であり、いい大学かどうかは図書館をみればほぼ分かるということです。それは、規模や建物や設備の新しさだけではなく、真摯に運営されていること、利用者視点でサービス改善が図られていること、そして何よりも図書館が大切にされていることです。

大学図書館は関係者の理解と協力によって支えられています。図書館を大切に思うその心を繋いでいくものとして、AGULIの図書館広報誌としての役割が一層強化されることを願っています。

(前大学図書館長 経営学部長

マーケティング・流通)



No.7

No.8

No.9

No.10

No.11

No.12

No.13

AGULI 創刊の頃の理工学部図書館の思い出

西尾 泉

NISHIO Izumi

今、私の手元に AGULI No.1 (Oct.15.1987) があります。その表紙には立派な時計（第99期卒業生寄贈の手巻き時計、現在は本館2階に設置）の写真が載っています。この1987年は、実は私が理工学部の助教授としてボストン大学から着任した1986年の次の年に当たります。勿論その頃理工学部は、今は亡き(?)世田谷キャンパスにありましたから、本館にあるこの時計のことは、色々な図書館の用事で選書室に行くまでは全くその存在すら知らなかったものであり、またこの時計を目にした時も、立派な時計だなー 今も動くのかなーと云った感想しか持たなかったものです。それが AGULI の創刊号の最初のページ、大学長の鶴澤先生の書かれた、「大学図書館報創刊にあたり」の最初のページにあったことは全く記憶の闇の中に消えていました。その当時の我々理工学部にとっての図書館は、かつての理工学部1号館の1・2階にあり、図書室に毛の生えたようなものでした。

その頃の私の図書館の利用方法は、主にサイテーションインデックス (citation index: ある論文を検索すると、その論文の出版後にどの論文引用されているかを調べる事が出来るもの。当然引用数が多いほど良い論文ということになります。厚くてとても重たい本です。今ではサイテーションインデックスの書籍体の存在を知らない方も多と思いますが) を使って引用論文の検索や孫引き、その引用の関係から研究グループのクラスター展開をやって、「こいつらツルンデル」とか、「大きな研究グループが二つあって、お互いに喧嘩している」とか見たり、自分の論文は一件しか引用されていない、しかもそれは自分が自分の別の論文で言及して引用したものだったりと落胆したりしていました。またその時の最新の論文の引用からその論文を探すと、確かこの雑誌は図書館にあったはずなのに……現在製本中でしばらくは見る事が出来ず、仕方なく他の大学の図書館のコピーサービスに研究費を使った経験など、今では考えられないことが何回もありました。今でもサイテーションインデックスの厚さと重さをよく思い出します。

現在ではこれら全てがデジタル化されて、キーボード一つで自由に検索できるようになり、それを使ったインパクトファクターなるものまで出てきました。

時代は変わったものですね…… Good Greif!

(万代記念図書館長 理工学部教授 高分子物理、生体物理)



No.14



増刊号 1991



No.15



No.16



No.17



No.18

図書館機能の変質・雑感

半田正夫

HANDA Masao

本学の第2校歌とまでいわれたペギー葉山の歌う「学生時代」の歌詞に「秋の日の図書館のノートとインクの匂い」という一節があるが、私の学生時代はまさにこのような情景が当たり前であった。図書館、とくに大学図書館は閑寂な雰囲気の中で時折、頁を繰る音とかノートにペンを走らせる音とかが聞こえるという、今でいえば息がつかまるほどの厳粛な感覚にとらわれるのが常であったといってよい。レポートや論文を書く場合には、現在のような手軽な検索ツールがないために、書庫に入り、薄暗い中を探し回ることに忙殺された。いまから考えると、ずいぶん無駄な労力を費やしたという感じがしなくもないが、逆に膨大な書物に囲まれているとなぜか心豊かになるのを実感したものである。

われわれの時代はアナログ時代であったが、それから時代は大きく変わり、いまやデジタル全盛の時代である。図書館の機能も当然に変質せざるをえないと思う。閲覧室のキャレルにはパソコンが並び、学生はこれを操りながら必要な文献を渉猟し、勉強することが可能となっている。かつて某大学の図書館がデジタル時代に対応した最先端の技術を取り込んだとのニュースを聞き、この図書館を見学に訪れたことがあった。職員に案内されて学生閲覧室に行くと、パソコンなどのデジタル機器の立ち並ぶその部屋は確かに壮観といってよいほどの素晴らしいたたずまいで、多くの学生が静かにパソコンに向き合っていた。傍らに行ってよくみると、彼らのほとんどはゲームで遊んでいたのである。バツの悪そうな顔をしている職員が気の毒に思えたことがあった。これは極端な例であるが、現代の大学図書館はわれわれの学生時代の図書館とは違ったものが要求されていることはたしかである。今から25年前、わたしは本誌から依頼されて「夢の図書館構想」と題する小文を載せたことがある（AGULI 15号）。そこでは、将来の大学図書館としては学生センターとしての機能を持たせるべきだと提唱した。その考えは今も変わらない。本学の新しい図書館がそのような方向に進むことを期待したいものである。

（青山学院大学名誉教授 元学院理事長 元大学長 元大学図書館長）



No.19

No.20

No.21

No.22

No.23

No.24

No.25

貴重図書閲覧室について

三 嶋 輝 夫

MISHIMA Teruo

在職中に何度も関わった本学の新図書館建設計画は未だ実現していないが、将来の新図書館が教育機能だけでなく研究機能も兼ね備えるべきだとすれば、貴重図書閲覧室も必要になると思われるので、今回は外国の名門大学のそれについて紹介してみたいと思う。貴重図書閲覧室というのは古典の手写本や、今では手に入りにくい図書を保管し、限られた閲覧希望者だけに見せる部門である。自分が訪れたのはイェール大学とケンブリッジ大学とオックスフォード大学のそれであるが、それぞれに設備や館員の対応も違って興味深かった。

先ずイェール大のそれはモダンなバイネッケ図書館の地下に有り、コンピュータも使えるようになっている。旧式な私は専ら手書きメモを取っていたのであるが、私以外の研究者たちは皆パソコンでメモしていた。利用する場合は、カウンターに行って見たい資料を書いたスリッパを渡して出て来るのを待つ。出て来たら、英語ではsnakeつまりヘビと呼ばれる紐のようなものと一緒に受け取って仕切られた専用の室に入り、書見台に書物をおいて、見たい頁にヘビさんを挟んで、なるべく傷めないように気をつけながら閲覧するのである。イェールの場合は全体に館員の方達も気さくで、肩が凝るということではなかった。

これに対してオックスフォードでは小生が見たかった資料はボードレアン図書館にはなく、自然史博物館に近い建物の地下に有った。ところが、先ず受付で遠慮しながら小声で館員の夫人に話しかけると、声が小さすぎて聞こえないと大きな声で言われたのにはこちらが驚いた。また閲覧室自体も広い空間であり仕切られておらず、しかも中には学生相手に声を出して指導する教授らしき人までいて、全く文献に集中できなかった。このオックスフォードに比べると、ケンブリッジの貴重図書室は重厚な本館の奥まった静かな一画に有り、館員も黙々とこちらの希望に対応してくれ、利用者たちのマナーもよくて遥かに集中出来た。先のボードレアン図書館も外観はとても美しいが、古いせい床鳴りが激しく、こと図書館に関する限り、小生は断然ケンブリッジ派である。

(前万代記念図書館長)



No.26



No.27



No.28



No.29



No.30



No.31

「普遍的精神の富」

西村 哲一

NISHIMURA Tetsuichi

パリのルーブル美術館で古代都市バビロンについての特設展を見学したことがある。点在する粘土板、他の展示品と等しく考古学的な「もの」の外観を呈してはいるが、それらは楔形文字で記された当時の書物なのであった。ある「書物」の解説プレートに記されたフランス語訳「ああ、いかに私が叫んだとて、神は永遠に沈黙したままではないか」に思わず足が止まった。神の不在と見紛うような神の沈黙。そこで神を否定せず、なお神を求めて呻吟する声。パスカルの声に比肩するかに思えるほどにモダンな声が、なぜこんな素焼きの板から立ち昇ってくるのか。文字による記録のもつこの直截性とは一体何なのか。

最後の氷河期がおよそ一万年前に終わる。現生人類種は水を得た魚のように地の表に個体数を増やす。農業の展開と都市の成立、富の集中と支配構造の登場。こうしたことと不可分だったのだろう、僅か数千年のうちに「文字」が創出される。

その一万年、いや五千年の間にも、私達は実は遺伝子レベルで進化し続けているという研究成果のあることを知って驚いたことがある。

だが、私達において著しいことは、そうした生物的な緩慢な進化を、知性的な蓄積による文化的な進展の速度が圧倒していることである。文字にまつわる技術の獲得こそは、私達という生物種がそうなる上での不可逆の通過点だっただろう。

ヴァレリーは文字の習得、「読めるようになること」を人生の最大事件の一つと考えた。「これで私たちは普遍的精神の富を手に入れる」と。いかにもフランス人好みの表現だが、それは「ただの自分」の限界を超えて、いつ誰がどこで考えたことでも、読むことを通じて直截に自分のものとできるということだ。

母国語や外国語の獲得、文字を含めた言語の獲得には多大な労力を要する。文化的、知的なレベルでも、やはり個体発生は系統発生を繰り返すのだろうか。

たとえ書物の形態が素焼きの板からパピルスや羊皮紙を経て電子的な媒体にまで変わろうと、この意味での文字の意義とその集合体としての図書館の価値は不変であろう。予算の逼迫等の事態を超えて、現生人類種は図書館を必要とし続けられる……。

(文学部教授 17世紀フランス哲学)



No.32

No.33

No.34

No.35

No.36

No.37

No.38

「なぜそこに図書館が？」

—キャンパス、理念を語る—

伊藤 悟

ITOH Satoru

私のオフィスは間島記念館に置かれている。校友・間島弟彦の青山学院に図書館が必要だとの願いと寄附によって建てられたのが間島図書館、現在の間島記念館である。そして間島図書館を増築するような仕方で隣接しているのが現在の青山キャンパスの大学図書館だ。実際に今でも間島記念館は一部が大学図書館と直結して図書館としての機能を果たしている。

間島記念館には、学院宗教センター、学院資料センター、学院財務部などが入っているが、ある大学ではチャペルと図書館が同じ建物の中に入っていたり、別の大学ではチャペルと向き合うような仕方で図書館が建てられていたりする。私大、とりわけキリスト教大学の多くはキャンパスの建物配置にこだわりを持ち、キャンパス計画や建物設計にはそれなりにその大学の教育理念が込められている。キリスト教信仰と学問知識とを分離させないという姿勢や、両者が互いに牽制し合って真理を求めていくという姿勢、あるいは信仰に基づいて学問研究を行う等々。

本学15号館「ガウチャー・メモリアル・ホール」もその典型である。すなわち1・2階部分は吹き抜けの「ガウチャー記念礼拝堂」であり、その上に教室や研究室などが配置され、まさに「信」と「知」を一体化させ、「信」の土台に基づいて「知」の世界を展開するという青山学院の建学の精神「青山学院の教育は永久にキリスト教信仰に基づいて行われなければならない」（学院寄附行為第4条）を体現した建物となっている。

間島記念館がかつての図書館であり、現在は学院の中核機能（宗教的・学院史的・財政的）を担っている部署が入って図書館と隣接しているというのも、決して単に便宜的にそうしたのではない。むしろこの隣接して接点を持っているという位置関係が、本学の学問研究のあり方や体勢を象徴していると言ってよいだろう。

近年、斬新なデザインの図書館建築や最新設備を備えた大学図書館が目立ったり、はたまた図書館の中にカフェを配置したり、シアタールームを併設したりと、図書館という発想自体が大きく変化してきている。しかし斬新性や機能性や話題性だけではなく、大学図書館はキャンパス全体との関係のなかで、そこで学び研究する人々にどのような価値観、世界観、人間観を与え、どのような学問的姿勢と人間形成に向かわせようとしているのかを示す重要なメッセージでなければならない。本学はそうした理念を大事にしてきた大学であり、これからもそれを継承する使命と義務を負っている。

（大学宗教部長 教育人間科学部教授 キリスト教教育）



No.39



No.40



No.41



No.42



No.43



No.44

図書館の階段

永山のどか

NAGAYAMA Nodoka

私がまだ某大学の大学院生だった頃。大学の研究所付属の図書館のエレベータに乗っていたところ、プツッと電気が切れエレベータが止まってしまった。20分後にエレベータ会社の人が来て私を「救出」してくれたが、その20分の長かったこと。楽をしようとエレベータを使ってしまったことを、暗いエレベータの中で後悔した。それ以来、私は3階建て以下の図書館では階段を使うようにしている。

階段を意識的に使うようになると、階段にも個性があることが分かってくる。私はドイツで資料収集することが多いが、ミュンヘンの州立図書館は中央部分が吹き抜けになっており立派な階段が2階までまっすぐ続いている。もともと宮廷図書館だったと知って大いに納得したことがあるが、その階段を上がっていると、これから研究を頑張ろう、と気合が入る。やはり見た目は重要である。

ドイツ西部のゾーリンゲン市の文書館——図書館も併設されている——も、階段に工夫が凝らされている。構造自体は何の変哲もないが、写真のように、階段の壁に、文書館員が企画・作成したポスターが貼られている。そして図書館の入り口となっている3階の踊り場には、アンティークの暖炉が飾られている。そこでしか得られない情報、そこでしか見られない物が、その階段にはある。私は博士論文の執筆でこの文書館をよく利用し、そのたびごとに3階まで歩いたが、この階段を苦だと感じなかった。



ゾーリンゲン市文書館の階段

階段の踊り場に物を置き、壁にパネルやポスターを掛けたり、貼ったりすることは、地震の多い日本では無理なのかもしれない。様々な制限があるなかで、青山学院大学の本館の階段は踊り場の掲示板で図書館情報を発信するなど工夫をしている。提言、というのもおこがましいが、階段の上り下りを楽しいものにするために、踊り場の掲示板に、職員の「今日/今週のひとこと」など、「そこでしか得られないメッセージ・情報」をもっと積極的に発信するのはどうか。見た目、という点では、階段の壁の色を、青山キャンパス3号館の階段のようにきれいな色にするのはどうだろうか。

(経済学部教授 ドイツ経済史)



No.45

No.46

No.47

No.48

No.49

No.50

No.51

ドキュメンタリーの収集

大石 泰彦

OISHI Yasuhiko

いま私は、法学部で、「ヒューマン・ライツの現場A」という1年生向けの専門科目を担当している（ジャーナリストの野中章弘氏と共担）。半期15回の授業を、「孤立に向き合う」「私たちは自由か」「戦争を知っているか」「汚された大地に立つ」「貧困を見つめる」という各3コマずつ5つのブロックに分け、各ブロックが「ドキュメンタリー映像を見る」→「レクチャーを受ける」→「ディスカッションをする」という順序で進んでいく授業である。ここでは受講者に対し、「安易に理論や解決策を持ち込まず、まずはまっさらな状態で社会の現実を直視すること」が求められる。たぶん、全国の法学部で、このような授業を開講しているのは本学のみであろう。

法学部は、各種公的試験に直結する学部である。そのためかどうか、その教授法は、全国に法学部が10数校しかなく、それらがいずれも法曹と官僚の養成を主な目的としていた時代と大きくは変わっていない。全国に100校近く存在し、明らかに大衆化している現代の法学部においても、法律専門科目の授業はだいたい、概説書や判例集を頼りに、学生の頭に難しい概念を次々と詰め込んでいくような形式で行われているのである。

しかし、学生は一部の例外を除き、厳しい社会の現実をほとんど知らない。受験勉強で多忙であった彼らの多くは新聞すら読まず、また、そうした自身の姿勢に対する問題意識も薄弱である。私は学部で「憲法」の授業も担当しているが、以前は時々、自分が空しいことをしているような気持ちになった。なぜなら、目の前の受講生のほとんどは、この世の被暴力、被差別、貧困、孤立、被弾圧などの「現実」を知らないのに、私はそれらの解決のための「理論」を講じているのだから。何とかして、彼らにリアルな社会を見せなければ……。

試行錯誤は現在も続いているが、そんな私が図書館に望むことは、書籍・雑誌等のみならず、社会の現実を伝えるドキュメンタリー作品を系統的・継続的に収集し、学生の利用に供してほしい、ということである。「現実を見ること」によって、多くの学生の意識は揺さぶられ、それが向学心や社会認識の形成につながる、と私は確信している。

（法学部長 憲法、メディア法、メディア倫理）



No.52



No.53



No.54



No.55



No.56



No.57

開架図書室と『本を読む本』

田中正郎

TANAKA Masao

幼い時、母親の買い物についてゆき、近所の果物屋にゆくのが楽しみでした。山のように積み上げられた色とりどりの果物を眺めたり、よい香りがするのでとても好きな場所でした。迷路のように通路があり、とても広い店内は、まるで冒険をしているようで、ワクワクしました。そのためか、渋谷スクランブル交差点近くにある渋谷西村フルーツパーラーはお気に入りの場所です。

さて、理学部に入学し初めて大学の図書館に入った時、高等学校の図書室とは比べようもない量の図書と建物の規模に圧倒されました。一年次・二年次の時は、基礎的な実験科目が多く、図書館では本を読むのではなく、授業の準備をするために閲覧室を利用していました。図書館で本を借りることはあまりありませんでしたが、目的もなく開架図書室をただ歩き回ることや、本の匂いが好きでした。

三年次になり、指導教授が流通・マーケティングの研究者であったことから、流通や商業に関心を持つようになりました。そのためさまざまな文献を読まなければならなくなりました。しかし、膨大な量の書籍の中からどのようにしたら必要な書籍に出会えるのか分かりませんでした。そのようなおり、新聞かなにかの書評を読んでいて、アドラーとヴァン＝ドレーンの著作である『本を読む本』というタイトルの本を知りました。当時は日本ブリタニカから翻訳が出版されていて、私もその本を持っています。今では、講談社学術文庫から再版されています。

『本を読む本』は本を読むための手引き書として、大学生に向けて書かれた本です。その中にシントピカル読書という読書方法が紹介されています。この本を読んで、開架図書室の面白さを知ることができました。幼いころにワクワクした果物屋を大人になってから訪れた時、よい香りには変わりはありませんが、ボリューム感に圧倒されていないことに気がきました。

(副学長 経営学部教授 流通・マーケティング)



No.58



No.59



No.60



No.61



No.62



No.63

新図書館計画策定に寄せて

押 村 高

OSHIMURA Takashi

過去 20 年間の大学図書館をめぐる主要な変化は、いうまでもなく情報化とデジタル化であろう。文科省も過去の博士号取得論文のデータ化を推奨しているようだ。しかし、未来志向のデジタル図書館を推進することに、懸念が湧かないわけでもない。

たとえば、ハーバード大著名学者の講義シリーズ映像が図書館で視聴できるとしたらどうだろう。英語の堪能な学生なら、思想や哲学の講義を聴くより、マイケル・サンデルの講義を図書館のブースで視聴する方が有益な時間の使い方だと感ずるかもしれない。残念ながら、ほとんどの思想や哲学の教授はまだサンデルと張り合う準備ができていない。

ネットを活用した授業も行われているが、かつて聖書が地域語に翻訳され誰もが手に取ることができるようになったときカトリック聖職者がその権威を失ったように、インターネットの方が専門の情報が得やすく、その理解も容易ということになれば、大学教育そのものの権威は低下し、教授も面目が立たなくなる。

デジタル化も同様である。デジタル化に適合し、データ処理が容易な文献の比重が高まり、より多くの人々がスクリーンで閲覧・加工できる資料のみに人気が偏ってしまう惧れはないのか。変化の影響は、単に媒体や技術の問題を越えて、学問の評価基準にまで及ぶ。

恩師が、英和辞典が紙媒体であり続ける必要性を説いていたことを思い起こす。頻繁に引く箇所が付いた手垢は一種のブックマークであり、一度調べた単語は、次に引く際にもその部分に手が掛かっただけで、かつて見た内容が第六感によって甦ると言っていた。私も類似の経験をして、アナログ感覚の重要性を実感したことがある。

デジタル化を特徴とする情報図書館も大いに結構だが、大学教育に与える長期的な影響、そして学生がデータを批判的に摂取する力を持っているかどうかをしっかりと見据えてから構想してほしい。

(副学長 国際政治経済学部教授 政治哲学)



No.64



No.65



No.66



No.67



No.68



No.69

100号記念おめでとうございます！

茂 牧 人

SHIGERU Makito

図書館報 100号記念おめでとう。これを機に、図書館の恩恵にほんの少し預かったものとして、図書館とその職員の方々に祝意と謝意を表したい。

筆者は、4年前に『ハイデガーと神学』（知泉書館）を上梓したが、そこではハイデガーの思索を否定神学の伝統の中に置いてみるときに、形而上学の克服のモチーフを取り出すことができることを論証した。その否定神学の伝統を研究するために図書館からかなりの本をお借りした。印象に残っているのは、偽ディオニュシオス・アレオパギタの『神名論』『神秘神学』の入った Corpus Dionysiacum からギリシア語の鍵語を読み込み、また、クヴィントの編纂したエックハルトの『ドイツ語説教集』全5巻で古ドイツ語を検討したことであった。

さらに、ハイデガーが言及しているルターの原文を、ワイマール版のルター全集を借りて読み、また、ハルナックの『教理史教本』全3巻からハイデガーの引用をチェックしたりもした。

もちろん図書館に入っていない文献もあったが、レファレンスで他大学の図書館から取り寄せていただいた。職員の方が手際よく依頼してくださり、届いた本をお借りして、一部をコピーすることができた。少し前にもシェリングの弁神論研究のために、フルマンズの基本的二次文献を届けていただいた。

特に、貴重図書室の本を見たい旨を申し出たときに、親切な職員の方が、案内してくださり、手に取ることができた。そのさい、ついでにトマス・アクィナスのレオニナ版の全集も見ることができて貴重な経験をした。

しかし筆者は、まだまだ図書館を使いこなしているとはいえない。「早く借りて下さい」と迫っている本が書架に並んでいる気がしてならない。しかし、こちらの教養が深まっていかないとその本を手には取ることがない。かくも図書館は、長い時間を必要とする施設であり、本人の教養を映し出す鏡でもある。今後青山学院大学の図書館が、数十年後に借りてくれるかもしれない本を並べておける度量の広い図書館になっていただきたいと心から願っている。

（総合文化政策学部教授 西洋哲学、宗教哲学）



No.70



No.71



No.72



No.73



No.74



No.75

デジタル時代の図書館に期待すること

LOPEZ Guillaume

ロペズ ギヨーム

現代はウェブとデジタル社会の只中にある。筆者の専門は情報工学で、常にデジタル化された情報を取り扱っていて、“物理的な”本と触れる機会も減ってきている。研究活動においても、専門分野に関する教科書は常に手元に必要なため、図書館に借りるよりも研究室に置いておきたい現状である。

それでも大学図書館を完全にバーチャルにすれば良いかという、筆者は違うと考えている。図書館の物理的な存在が減少せざるを得ないかもしれないが、学術的な視野を広げる場と知恵と出会う場として重要だと思う。その場を存続、活性化させるために、様々な取り組みの工夫が必要と考える。

筆者の母は南仏の田舎の図書館でボランティアを務めており、定期的開催されるイベントに関連した日本の書籍、ポスターなどを郵送している。子どもと大人により本に興味を持ってもらうため、季節や旬なテーマに関する文化祭のようなイベントを開催している。本を中心に様々な人や周辺団体から一時的に集めた様々なメディアを介してそのテーマを取り上げて集客している。来場者は必ず本を借りて帰っているそうである。

大学図書館でも定期的に旬の学術関連テーマに関する教材（古典・最新の参考書、雑誌など）をまとめて紹介する場を設けると同時に、専門家によるお薦めの紹介や、関連の他メディアの展示スペースを設ければ、その期間中通常図書館に来ない学生、職員、教員が足を運ぶことになるだろう。また、研究室にあり、図書館にない教材も多くあると思う。図書館とそのユーザも各研究室からそういう教材を一時的に借りられるような仕組みがあれば、大学のリソースがより効率的に活用される。

そして、今日、大学の研究者にとって、電子ジャーナルやオンラインによる論文データベースの検索機能は欠くことができない重要な研究資源となっている。しかし、Google Scholarのようなサイトで研究関連文献が検索できるが、膨大なリストの前で素人の学生は中々有用な情報を見つけることができない。経験のある教員でもターゲットを絞るには時間がかかる。

図書館のスタッフに“何々に関する教科書を探しています”と聞けば、直ぐに案内して頂いている。同じように、今後の図書館にもう一つ期待したいのはデジタル情報を効率良くフィルタリングし、本当に必要な情報がより簡易に見つかるような“ソフト”的な知能をもったデジタルポータルとしての役割である。

(理工学部准教授 ウェアラブル情報学)



No.76



No.77



No.78



No.79



No.80



No.81

やはり本は読もう

稲 積 宏 誠

INAZUMI Hiroshige

私はけっして読書家ではありません。そして、文学作品を読み解くことも苦手です。

そんな私ですが、小学校のときに読んだひとつの短編とふたつの大作のことはいまだに記憶に残っています。

小学校4年生の春、神戸大学に通う従姉が私の家を訪ねてきました。とてもきれいな従姉で、少々緊張した記憶があります。「ひろしげちゃん、この本を読んでみたら」と言って手渡してくれたのが『星の王子さま』でした。読んでみたものの、あまりピンとこなかった、そんな記憶があります。

それより少し前に、NHKのテレビで「次郎物語」を毎週見ていました。そのこともあってか、5年生のころに、本を買って読みました。おもわぬ大作。テレビで扱われていた中学生までの次郎が大人になっていく。その過程を描いた4部、5部までを読み切ったときの、何とも言えない充実感、そして最後に涙したことが忘れられません。

中学に入るかどうかのころだったか、『大地』を読みました。ちょうど歴史や世界への関心が高まっていたときだったのだと思います。纏足という風習、軍閥の割拠、少し難しいところはありましたが、中国の文化や歴史、中国大陸に広がる世界、複雑な人間模様、胸躍らせ、そして読むなかで涙したことを思い出します。

本を読んだ後に、サン＝テグジュペリを、下村湖人を、そしてパール・バックを知り、その人たちの生きざまを知るようになります。

パイロットというより飛行機乗り、そのひとが小説を書き、随筆を書く。第一次世界大戦からのヨーロッパ社会に関心を。教育者であり社会活動家としての執筆。大正期から戦争に至る歴史に目を。中国を母国のように想うアメリカ人。中国の革命にいたる歴史に興味を。作品それぞれが、その作者のリアルな生きざまによって、あらためて見直すことができましたし、作品から感じられるものも大きかったように思います。

作品だけから感じ取れる感受性だけではなく、その作り手に思いをはせることで、はじめてその作品のことを深く感じる。世界を広げ、新しく出会うすべてのことにわくわくしたとき。実体験を補う、実体験につなげてくれる多くの出会い。

やはり本は読もう。

(社会情報学部長 情報理論)



No.82



No.83



No.84



No.85



No.86



No.87

図書館のそばに住む

会 田 弘 継

AIDA Hirotsugu

蔵書の管理がままならなくなると、図書館のありがたみがつくづく分かる。前職の仕事柄、この40年、3年に1回ぐらいで引っ越しをくりかえしてきた。引っ越しの最大の難物は書籍。蔵書総数は数えたことはないが、およそ1万冊だと皮算用している。

半分から3分の2は実家の倉庫に死蔵されており、最終的に持ち歩いてきたのは5千冊以下だ。これを引っ越しとともに持ち歩いていると、前職の忙しさもあって整理を終えないまま次ぎの引っ越しが来てしまう。何のために、持ち歩いているのか分からなくなる。さすが海外に出るときは（欧州と米国に2回ずつ計11年住んだ）、絞り込んで持参した。

14年前、米ワシントン市郊外に住んだとき、歩いて2分ほどのところに大きな郡立中央図書館があるのに気付いた。便利このうえないことが分かった。一時帰国した際、日本の雑誌にアメリカ思想史の連載を頼まれ、二つ返事で引き受けたのは、この図書館を強い味方にできると思ったからだ。それだけでない。世界最大級の連邦議会図書館の司書に友人をつくっていたから、こちらも大いに活用させてもらった。

以来、帰国してからも大きな図書館のすぐそばに住むことにして、幸いそれを実行できている。10年前に帰国した後は、実家の整理もあり埼玉の故郷に戻ったが、そこからほど遠くないところに仕事場兼住宅のマンションを確保した。市の中央図書館から歩いて2分だから、自分の書庫のようにして利用した。本学に転職してからは、通勤のため仕事場を移したが、これも山手線沿線コンソーシアム加盟大学から歩いて3、4分で、図書館をしょっちゅう使っている。

さらに仕事場から2分の地下鉄駅から直通20分ほどで、日本最大の国立国会図書館のすぐ脇の地下鉄駅に着く。ワシントン郊外時代と一緒の図書館「2正面」環境だ。その当時の雑誌連載は『追跡・アメリカの思想家たち』（新潮社）という本に結実した。さあ、今度は前職と違って研究が本職なのだから、本をどんどんと書かねば、と思っている。

ちょっと残念なのは、本学の図書館の寂しさだ。仕事場そばの大学に比べても明らかに見劣りする。大学生残り競争時代、小手先は効かない。結局は教員・学生がどれだけ勉強するかで勝負がつく。改築計画もあったやに聞く。ぜひ実現して、大競争を勝ち抜くインフラを整えたい。

（地球社会共生学部教授 ジャーナリズム・思想史）



No.88



No.89



No.90



No.91



No.92



No.93

未来志向でも、図書館は大学のいのち

新 倉 修

NIIKURA Osamu

図書の収納スペースは悩みの種だ。これは世界に共通する。アメリカでも公共図書館がどんどん廃書に走っている。過疎化が進み利用者も減れば、図書館は消滅する。ある新聞では、古代エジプトで、アレキサンドリア図書館はパピルスに記された書籍を大量に収蔵していたという。石板や石碑も含めると総重量は想像を超える。しかし、アレキサンドリアはおろかカイロに行っても、このような歴史的遺産はない。現物はとうに喪失し、伝承にとどまるからだ。

ヨーロッパのルネッサンスが、ペルシャやトルコに伝わったギリシャ・ローマの古典の発見に始まるというのは、よく知られている。モンテスキューがペルシャ人の目を通して、中世ヨーロッパの奇習を批判したことも有名だ。比較法の原点ともいべき『法の精神』がこのような志に根ざすことも、容易に想像できよう。それを支えたものは、モンテスキューの場合、個人の蔵書だった。想像をたくましくすれば、公共図書館があれば、何人ものモンテスキューが人文主義の扉を開いたと言えそうだ。

ベルリンでは、政府の助成金を得て、野党の「グリユネ」が図書センターを運営している。しっかりとした情報と熱意のある協働が結びつき、政策を軸にした論戦が「公共空間」をつくらせている。こういう文化こそ、ドイツの強さではないか。夜10時を過ぎても、ビールを傾けながら、過去を振り返り、未来を語り合う文化がここにはある。その文化を信じれば、ユーロ危機や移民問題や気候変動に 대응する政策を創り出せないわけではない。あえて言えば、お友達だけの親密な会食に育まれる政策集団に対して、うさんくさが消えないのは、本物の民主主義が地上のどこかに存在すると信じるからかも知れない。

人間にはどれだけの土地が必要か、という深刻な問に対して、死んでしまえば畳一畳分という辛辣な答を出したのは、トルストイだった。その伝で言えば、民主的な人間になるにはどれだけ図書が必要か、という深刻な問に対して、読まれなければ聖書でも余計だというのは、ひどすぎるギャグかも知れない。

ともあれ、e-Commerce や e-Politics が日常化する未来でも、情報の集積と利用の要である図書館は、必需の地位にあるべきだ。

(法務研究科教授 刑事法)



No.94



No.95



No.96



No.97



No.98



No.99

学生部門 ノミネート

- | | | |
|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 📖 赤い手 📖 赤毛のアン 📖 青が散る（上・下） 📖 The Miraculous Journey of Edward Tulane 📖 What I wish I Knew when I was 20 📖 永遠の0 📖 アルジャーノンに花束を 📖 生かされて。 📖 絵本ワニのオーケストラ入門 📖 エラゴン—遺志を継ぐ者ドラゴンライダー 📖 折れた竜骨 📖 風の歌を聴け 📖 君の臓腑をたべたい 📖 きらきらひかる 📖 切りとれ、あの祈る手を—“本”と“革命”をめぐる五つの夜話 📖 国際政治—恐怖と希望 📖 告白 📖 心の野球—超効率的努力のススメ 📖 ご冗談でしょう、ファインマンさん 📖 最後の一葉 | <ul style="list-style-type: none"> 📖 塩狩峠 📖 沈黙 📖 罪と罰 📖 チャリング・クロス街 84 番地—書物を愛する人のための本— 📖 十五少年漂流記 📖 スプートニクの恋人 📖 The Great Gatsby 📖 Percy Jackson & the lympians 📖 スペイン語の入門 📖 代表的日本人 📖 詩集 遊星ひとつ 📖 魂の声 リストカットの少女たち—私も「リスカ」だった 📖 人間力の磨き方 📖 葉桜の季節に君を想うということ 📖 反資本主義の亡霊 📖 アフガニスタンに住む彼女からあなたへ—望まれる国際協力の形 📖 「分かち合い」の経済学 📖 若きウエルテルの悩み 📖 ハンニバル 📖 路上 | <ul style="list-style-type: none"> 📖 嵐が丘 📖 高瀬舟 📖 国家の品格 📖 マザー・ツリー—母なる樹の物語 📖 学んでみると量子論はおもしろい 📖 ブラームス 📖 雪の断章 📖 レ・ミゼラブル 📖 アンドロメディア 📖 論理トレーニング 101 題 📖 クリスマス・キャロル 📖 食料自給率の「なぜ？」—どうして低いといけないのか？ 📖 学び続ける力 📖 帰ってきたヒトラー 📖 台湾の運命 📖 金持ち父さん貧乏父さん—アメリカの金持ちが教えてくれるお金の哲学 📖 ノルウェイの森 📖 Howl's Moving Castle |
|---|---|--|

学生からのオススメポイント

📖 「分かち合い」の経済学

経済と生活はこんなにも結びついている！経済学を学び専攻する人も、著者の“キテレツ”な発想に触れてみては。

📖 国家の品格

正直に言えばやや右寄りであるが、「日本人として社会に出てから誇りを持つ」インセンティブを与えてくれるので一読の価値あり。日本文学者のドナルド・キーンは、“物が朽ち果てる姿は美しいと感じるのは日本人だけだ”と述べている。グローバル化によって忘れ去られてしまった日本を愛する心を取り戻すためには本書は非常に適していると思われる。

📖 若きウエルテルの悩み

どうして死んでいない人間（ゲーテ）が主人公ウエルテルの自殺までの経緯や気持ちをこのように読者への共感と共にあますことなく伝えられるのか？ゲーテの天才ぶりとうエルテルの葛藤に心ふるえます。

教職員部門 ノミネート

- | | | |
|---|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 📖 大地 📖 アラビアの夜の種族 📖 砂漠の女ディリー 📖 さまよう刃 📖 書物としての新約聖書 📖 男子の本懐 📖 ちょっと今から仕事やめてくる 📖 トーラーの名において—シオニズムに対するユダヤ教の抵抗の歴史 📖 徳川家康 📖 図書館戦争 📖 ドミトリーともきんす 📖 榆家の人びと 📖 福翁自伝 📖 物理と対称性—クォークから進化まで Science break | <ul style="list-style-type: none"> 📖 緑の家 📖 もっと、狐の書評 📖 野生の探偵たち 📖 夜と霧 📖 リトル・トリ 📖 暗いところで待ち合わせ 📖 アーサー王伝説：7つの絵物語 📖 自閉症の僕が跳びはねる理由—会話のできない中学生がつづる内なる心 📖 ツバメ号とアマゾン号 上・下 📖 すべての子供たちに—ボリス・ヴィアン詩集 📖 数覚とは何か？—心が数を創り、操る仕組み 📖 竜馬がゆく 📖 植物図鑑 | <ul style="list-style-type: none"> 📖 赤めだか 📖 「悪」と戦う 📖 大学ダイエツト講義 📖 なぜ猫は鏡を見ないか？ 📖 すべて真夜中の恋人たち 📖 風が強く吹いている 📖 下町ロケット 📖 空飛ぶ広報室 📖 玉嶺よふたび 📖 チベット滞在記 📖 クローバー 📖 一流の勝負力 📖 人間の条件 📖 経済のニュースがよくわかる本 日本経済編 / 世界経済編 📖 茨木のりこ集：言の葉 1～3 |
|---|---|---|

教職員からのオススメポイント

📖 一流の勝負力

活躍するスポーツ選手の例を交え、メンタルトレーナーという仕事を知ることができます。就活、勉強において学生の可能性を広げてくれる本だと思います。

📖 人間の条件

こんなに本を読んで涙したことがあったらどうかと思える感動の名作です。戦争は人間の尊厳を奪うものだと思わせられます。平和な時代に生きる皆さんに読んでいただきたいです。



2015/12/15～2016/1/15の期間
 大学図書館本館・万代記念図書館にて、
 AGULI 100号発行を記念して
 利用者の皆様からオススメの本を推薦していただきました。
 たくさんのご応募ありがとうございました。
 図書館に所蔵されている資料もありますので
 是非手に取ってご覧ください。

図書館長人事のお知らせ

三村優美子図書館長の退任にともない、近藤泰弘教授が4月1日付で図書館長に就任されました。

4月の図書館オリエンテーションのご案内

本館 青山キャンパス

図書館は、授業やレポート作成で必要になる資料がたくさんあり、皆さんの学習・研究をサポートしています。大学の図書館を使いこなすと、学習や研究がスムーズに進み、将来にも役立ちます。

【新入生対象】

図書館利用オリエンテーション

- 日程：4/2（土）～4/6（水）※日曜除く
 - 時間：全回同内容
 - ① 10：10～10：45 ⑤ 14：10～14：45
 - ② 11：10～11：45 ⑥ 15：10～15：45
 - ③ 12：10～12：45 ⑦ 16：10～16：45
 - ④ 13：10～13：45 ※4/2（土）は②～⑤のみ
 - 定員：1回45名
 - 場所：図書館1階マルチメディア室
- 気軽に参加できます。
大学図書館の雰囲気を実験してください。
図書館をうまく使って、幸の良いスタートを！

【全学年対象】

図書館利用オリエンテーション

- 日程：4/7（木）～4/13（水）※日曜除く
 - 時間：全回同内容
 - ① 10：20～10：50 ② 15：10～15：40
 - 定員：1回14名
 - 場所：図書館地下情報検索コーナー
- 大学での学習・研究に不可欠な図書館 HP・OPAC を中心に説明します。新入生対象よりも詳しい内容です。
今さら聞けない、間に合わないとなる前に、ぜひご参加ください。どなたでも参加できます。

●授業に役立つステップアップガイダンス

STEP1. レポートを作成するには？
STEP2. 欲しい資料はどこにある？
日程：4/18（月）～4/29（金）※土日除く
時間：9：00～10：30
場所：図書館1階マルチメディア室

大学でのレポートは高校までの感想文とは全くちがうものです。大学図書館をうまく使うと学習の効率が大幅アップします。レポート作成（作成の10ステップ、引用・出典表記方法）や資料の管理方法、図書館の資料の探し方データベースの基本的な使い方を説明します。
主な対象：学部1・2年生

●大学院生のための図書館案内

4/9（土）16：00～16：50 場所：図書館1階マルチメディア室

●スタートダッシュ・ガイダンス～専門DBをマスターしよう～

- ① 経済・経営・会計編 (Needs Financial QUEST) ①4/7(木) 18:30～19:30
- ② 海外文献編 (ProQuest) ②4/8(金) 18:30～19:30
- ③ 人文学編 (OED online, Oxford Dictionary of National Biography, MLA) ③4/11(月) 18:30～20:00
- ④ 海外文献応用編 (Web of Science) ④4/12(火) 18:30～19:30
- ⑤ 法学編 (Westlaw Next) ⑤4/13(水) 18:30～19:30
- ⑥ 文献管理編 (Refworks) ⑥4/13(水) 15:50～16:50

場所：図書館1階マルチメディア室

データベースの提供元から専門講師をお招きして、説明していただく講習会です。例年、参加者から大変好評な講習会です。
主な対象：学部3年生以上、院生

万代記念図書館 相模原キャンパス

For Freshman 初心者マークの 図書館利用オリエンテーション

図書館の施設を案内しながら、本の貸出・返却などの基本的な利用方法や、本や雑誌の検索方法、書架での探し方を説明します。試験直前に慌てることのないように、高校までとは違う大学図書館の利用方法をマスターしてください。コンピュータで制御された図書館地下自動書庫内の本の利用方法についても説明します。

日時	時間	学部・学科
4月4日（月）	12：30～13：20	電気電子、機械創造、経営システム
	14：00～14：50	化学・生命、情報テクノロジー
4月5日（火）	11：30～12：20	社会情報
	14：00～14：50	社会情報
	15：00～15：50	物理・数理、地球社会共生
4月6日（水）	10：00～10：50	理工全学科・社会情報・地球社会共生
	11：30～12：20	理工全学科・社会情報・地球社会共生
	14：30～15：20	理工全学科・社会情報・地球社会共生

- 所要時間：50分 ●集合場所：B棟1階 図書館内中央吹き抜け下
- ★上記日程で参加できなかった方は、下記の日時にご参加ください。（土日を除く）
- 4月7日（木）～15日（金） 11:00～11:50 13:30～14:20 15:00～15:50

編集後記

青山キャンパスの現大学図書館は今年で開設40年目を迎えます。そして本誌AGULIは100号を迎えることができました。そこで図書館にゆかりのある諸先生方に図書館に寄せる思いを寄稿いただきました。いずれも味わい深いお言葉でエピソードや思い出などを綴ってくださいました。図書館には本と共に長い時間が宿っています。ぜひ有効活用してください。（館報編集委員長 福岡伸一）

青山学院スクール・モットー 地の塩、世の光 The Salt of the Earth, The Light of the World